

2-20 広報委員会

ホームページの全面的改訂を行い、5月には一般に公開をした。単に見栄えを変えたのではなく、その構成を大幅に変更した。特に、留意した点としては、まず所内の職員や学生が活用できることを重視した上で、所外への情報発信のプラットフォームとして機能するように工夫した。前者においては、所内でのセミナーなどの一覧を整備することや、後者においては、本研究所での顕著な成果を専門家以外の人にも理解できるように配慮してトピックス（下記リスト参照）として取り上げ、また、人事公募要領を公開して広く候補者を募るなどの努力を行っている。

出版物としては、従来から発行してきた「分子科学研究所要覧」が必要以上に大部になった割には所外への情報発信力が弱いので、これを補うように、新たに「分子科学研究所」という冊子を別に刊行し、本研究所の研究面の取組や運営をより簡潔に紹介するものとした。まだ、不十分な点はあるが、これが従来の要覧に代わるものと位置づけている。その他の出版物である一年間の研究面での活動を伝える英文誌「Annual Review」、研究所の現状・評価・将来計画は「分子研レポート」、学生を対象とした「総研大パンフレット（総合研究大学院大学物理科学研究科構造分子科学専攻/機能分子科学専攻パンフレット）」、上記のものではカバーできない研究所関係者の日常的な事柄については「分子研レターズ」を刊行した。この他にも、総研大の出版物である「総研大ジャーナル」の特集として「光分子科学」の特集の企画・製作に協力した。

本年度は本研究所創立30周年を迎え、広報委員会も30周年記念事業におけるホームページ、パネル作成などを通してこれに寄与すると共に、記念事業の報告集を編纂した。また、岡崎市の依頼により「施設へGo」というシリーズにおける本研究所の紹介番組に全面的に協力し、この作品はケーブルテレビにて放映されている。

この他にも、研究所主催の種々の研究会をできるだけ広く周知するためにポスターを作製・配布し、所員や学生の研究会などでのポスター発表のためのポスター印刷などの手助けも日常業務として行っている。

今後、各種出版物のそれぞれの役割をはっきりさせることにより、整理統合をはかること、また今までほとんどなされてこなかったこれら刊行物の英語版の刊行などを行っていかねばならない。広報に関する組織としては本委員会が行っているが、より効率的に業務を遂行していく集団としての広報室の整備も今後の課題である。

採用したトピックス

掲載日	件名
2005. 6.30	光で電子を動かし物性が変わるしくみの理論
2005. 7.11	ス・パ・キャパシタの巨大容量と作動原理をマイクロレベルで解明
2005.11. 2	波形変調パルスによる表面振動コヒーレンスのモード選択励起
2005.12.21	高速な光解離を利用した内殻励起状態及び光電離ダイナミクスの研究
2006. 3.23	量子のさざ波を世界最高精度で観測・制御 大森グループらが成功 【サイエンス、フィジカルレヴューレターズに相次いで発表】